

北海道自然歩道の各路線の概要

路線名		テーマ	説明
A1	維新の道	幕末・明治の歴史文化、噴火湾	幕末、旧幕府と官軍がたどった道を、榎本武揚あるいは土方歳三になったつもりで維新の歴史を偲びながら歩く道。途中では、大沼国定公園内を通過し、駒ヶ岳と大沼・小沼の織りなす雄大な景観を楽しむ。函館湾から噴火湾まで一気に北上し、その後、噴火湾に沿った海岸線を長万部まで進む。
A2	火山回道	清き水うるおす熱き大地に行く	「ニセコ」はニセコ積丹小樽海岸国定公園に、「洞爺湖」「支笏湖」は支笏洞爺国立公園に指定されている。札幌圏から車で2時間以内の距離にあり、休暇に最適リゾート地としての賑わいをみせている。夏山のハイキング・登山・川遊び、冬のスキーと四季折々の野外活動を満喫できる格好の自然歩道である。ニセコやルスツに点在するグレードの高い数々のスキー場、豊富な湯量を誇る多くの温泉地、噴煙をたなびかす活火山、白い飛沫を立てて流れる急流などが発する「陽・動的な魅力」と、これと対照をなす澄んだ水をたたえる支笏湖やニセコの湖沼群、また歌才のブナ林等の自然景観、山並みに囲まれて野菜が育つ畑地景観などがかもし出す「陰・静的な魅力」を、コントラストも鮮やかに感じさせてくれる。
A3	拓殖の道	石狩川・産業遺産	北海道の開拓の歴史を溯る道。前半は、石狩平野での稲作に挑戦した開拓移民の足跡を石狩川沿いに訪ね、後半は、かつての北海道の繁栄を担った空知の炭田・炭鉱の産業遺産を巡る。
A4	大平原の道	豊穡の大地	耕地防風林と直線道路によって縁取られた、十勝平野の広大な畑作地、牧草地を巡る道。平野の西端の新得と東端の浦幌を結び、帯広・中札内間には枝線も設け、十勝の中心都市帯広から、新得・中札内・浦幌の3方向へ放射状に路線をたどることもできるようにしている。
A5	霧と湿原の道	湿原・海霧・湖沼＝道東のウェットランド	東西に延びる釧路支庁管内の海岸線を横断し、そこに残る数々の自然の姿に接する。時に海霧に閉ざされ、サルオガセをまとわせた針葉樹林と風衝樹林を縫って続く海岸沿いの丘陵地をたどり、「厚岸場所」の歴史を巡り、シマフクロウの隠れ住む沼沢地＝火散布沼をかすめ、霧多布湿原を経て、霧多布岬に至る。また枝線として、我が国最大で、ラムサール条約でも指定されている世界的自然遺産である釧路湿原を巡り、タンチョウとクシロハナシノブに代表される大自然の生き物たちを訪ねる。
A6	海峡の道	日本で一番早い朝に会いに行く	オホーツク海と太平洋に突き出た根室半島の付け根から先端を目指す。北海道の最東端、日本で一番早く夜が明ける「生まれたての新鮮な旬の朝」を迎え、「東経145度49分16秒・納沙布岬」を目指す。
B1	山並みの道	日高山脈・清流	日高山脈が海に落ち込む襟裳岬を出発し、十勝平野の西端の日高山脈の山裾を南北につなぐ。日高山脈の威容を、時には近づき時には離れ、様々な距離や角度から眺め、深い緑の山並みから流れ出る幾筋もの清流を越えていく。また、先人の汗と涙の結晶である幾何学的に区画された畑地と、それを縁取るように育成された耕地防風林の織りなす、十勝独特の風景を満喫する。
B2	丘の道	彩りの大地	北海道の真ん中の、四季折々に彩りを変える丘の田園風景と十勝連峰と大雪山連山の眺望を楽しむ道。テレビドラマの舞台となり、写真家の被写体として好まれ、今や北海道を代表する景観として知られる風景の中を歩む。途中、広大な畑作地帯の中に残された緑のオアシスともいえる森林公園の数々に立ち寄り、上川南部地区を南北に縦断する。 *東西横断道と南北縦断道が交差する区間であり、旅人が憩い集散する(＝オアシス)として位置づけられるところである。
B3	豊流の道	北方樹林・天塩川	石狩川の流域から、峠を越えて名寄盆地へ歩を進め、大地を潤しながら流れる天塩川に沿って進む。最北の稲作地帯が広がる農耕地から、牛や羊が草を食む牧草地を抜けて、豊かな自然と人間の営みが見事に調和する上川北部の桃源郷を縦断する。
B4	オホーツク北海道	針葉樹林・栄歌の名残り・オホーツク海浜	かつて栄えた道北の林業地帯を抜け、ゴールドラッシュの夢の跡をかいまみて、北オホーツクの海岸に出る。北オホーツク道立自然公園の原生花園、湖沼群などの風景に触れながら、日本の最北端「宗谷岬」に至る。
C1	松前街道	松前藩・城下町・津軽海峡	津軽海峡を眺めながら道南の海岸線をたどる。江戸時代に和人が移り住み、北海道では最も早くから開けた土地であり、歴史を語る上で欠かすことのできないエリアである。本州的な村落景観が、そこに点在しており、北海道内ではほかにはない独特の雰囲気を感じる。沿線に点在する数多くの歴史の足跡を巡り、函館と松前を結んで、北海道を再発見する。
C2	縄文文化の道	縄文遺跡・火山	森町から恵山町まで、噴火湾から太平洋に向かう海岸線沿いに、南茅部町大船遺跡を中心とした道南の縄文文化を訪ねながら、ひなびた風情の感じられる漁村の風景と自然美あふれる海岸美を楽しむ。
C3	江差街道	日本海・奇岩・江差追分	噴火湾から渡島半島を横切って日本海に向かい、江戸時代に先人の努力によって開かれた古道をたどりながら、荒々しさを感じさせる海岸美を楽しみながら、江差追分の曲が流れる歴史の町江差を目指す。
C4	ソーラン街道	ニシン漁の夢の跡・古代遺跡・海水浴	東西横断道のニセコから、かつてのニシン漁の繁栄の面影を残す余市、明治時代に商都として栄華を誇った小樽、サケ漁の石狩、厚田と、ソーラン節の歌声が聞こえてくるような海辺の町や村を訪ね、月形で再び東西横断道に合流する。
C5	北の里山街道	大都市・サンクチュアリ・原始林	かつての「勇払越え」の経路に沿って、太平洋と日本海を結ぶ。札幌、北広島、恵庭、千歳と道央の諸都市を通過しつつ、その近郊に残された手稲山や藻岩原始林、野幌原始林や美々川、ウトナイ湖など、原始の姿を思い起こさせてくれる貴重な自然を訪ねる。
C6	殖産の道	炭鉱(やま)の記憶・北海幹線用水路・温泉ネットワーク	明治時代初期に政府によって推進された殖産興業政策により、石炭産業の大集積地を形成した地域の中に行く。敗戦後の復興期においても我が国の経済再建のために多大な功績を果たし、その後のエネルギー政策の転により、全ての炭鉱は閉山となった。大きな時代のうねりを今に感じさせる、数々の産業遺産とふれあひながらの旅を楽しむ。また、数多くの温泉にも立ち寄ることもでき、旅の期待を膨らませてくれる。
C7	東大雪の道	東大雪山系・深い森・産業遺産	十勝平野北部の東大雪山系の山裾をたどり、音更川を遡り深い山間に広がる人造湖「糠平湖」を訪ね、石狩岳やニベツ岳などの東大雪山系への登山口である十勝三股まで分け入る。
C8	蒼い大地への道	河川・湖沼	道東を代表する河川「釧路川」の様々な顔を眺めつつ、日本を代表する特色を持った釧路湿原、阿寒の両国立公園の魅力を満喫するとともに、その周辺の牧野、草地の牧歌的風景を楽しむ。釧路国境の峠を越え海岸線の斜里を目指す。
C9	オホーツク南海道	サケのふるさと・パイロットファーム・国後島	我が国の東の果ての人家もまばらな海岸線を、北方四島の一つ国後島の姿を国境の海峡越しに望みながら悠々と進む。サケの帰る川をいくつも越えながら、知床半島の根本まで進む。
C10	オホーツク東街道	オホーツク文化・原生花園・海跡湖	さいはての地知床五湖からサロマ湖まで、冬の流氷に覆いつくされる姿を思い浮かべながら、オホーツクの海岸線をたどる。湧沸湖、網走湖、能取湖など、広大で開放感を感じさせる湖や、色とりどりの野生の花々が咲き乱れる原生花園の眺めを楽しみながら、およそ6世紀から13世紀頃にかけてみられたとされる、多くの謎を秘めた「オホーツク文化」の痕跡に触れる。
C11	北天の道	天塩川・深い森・利尻富士	道北のかつての要衝であった音威子府から最北の地稚内を目指す。最初は天塩川の流れに沿って下り、幌延から豊富温泉を経由してサロベツ原野に入る。サロベツ原野からは日本海の海岸線に出て、その後は海上に浮かぶ利尻富士の雄姿を眺めながら、ノシャップ岬を目指して北上する。
C12	オロロン海道	日本海・夕日・海鳥	天塩山地が海に落ち込むゆったりと弧を描いて延びる道北の西海岸を、豊富町から増毛町まで10町村をつないで行く。日本海の広がり眺め、そこから吹きつける海風に吹かれながら、開発の手があまり入っていない素朴な北海道らしさを感じさせてくれる景色の中を進む。
C13	優駿の道	サラブレッド・昆布・風	日高山脈の山ふところに広がる牧場(まきば)を巡り、競走馬＝優駿のふるさとを訪ね、日高山脈と太平洋の景観を楽しみながら、襟裳岬に至る。